

## ボロブドールの仏教

岩 本 裕

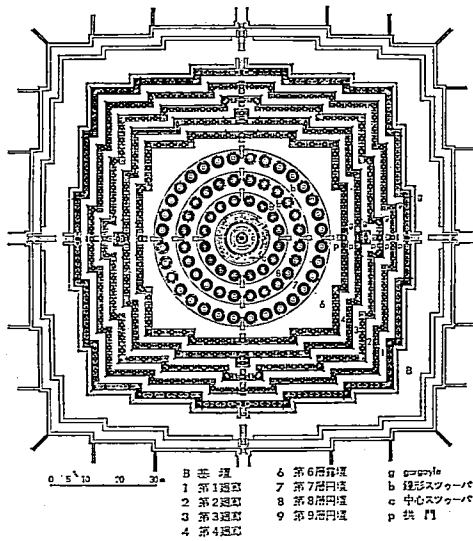
と文化」第十号（昭和五十六年六月）に述べたので簡略にすることにし、宗教的意義については従来の諸説を紹介するとともに、その問題点に関する種々の疑問を提出してみたいと思う。

### 一

ボロブドール さて、ボロブドールは中部ジャワにあり、の所在と外観 カンボジアのアンコール・ワットなどとともに世界における最も大きな宗教遺跡の一つであり、端的に言って明らかに仏教遺跡である。しかし、仏教遺跡とは言っても、他に類例のない形態と様式とを具え、

### ボロブドールの仏教

一九八〇年九月二十四日から二十六日にかけて、京都国際会議場においてボロブドール国際シンポジウム International Symposium on Chandi Borobudur が開催され、筆者もそのパネリストの一人として参加し、セッション(4)「ボロブドールを中心とする中部ジャワ史観」において卑見の一端を開陳した。このシンポジウムの議事録<sup>(1)</sup>は最近英文と和文と出版され、問題点が一応洗い出された感があるが、それだけに今後大きな問題を投げかけるに至ったことは、今さらに言うまでもない。ここでは、ボロブドールの歴史的背景については、筆者は右の『議事録』ならびにそれより早く「東南アジア——歴史

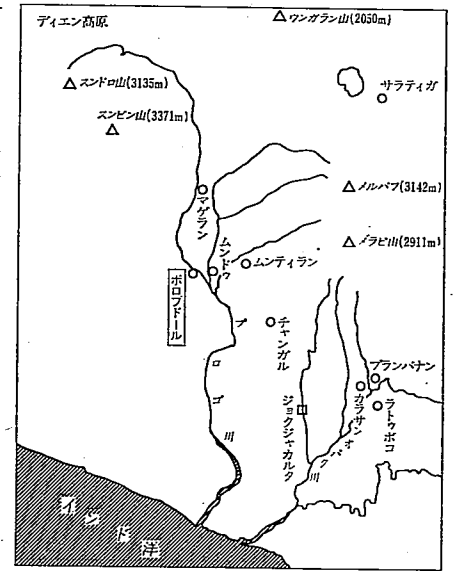


第2図 ボロブドール平面図

九層の壇台ピラミッドで、下から六層は方形で、その上に三層の円形の壇があり、最上壇の第九層の中央に基部の直径が約十六メートルの鐘形の塔がある。この九層の壇台の平面図を見ると、第一層(基壇)から第五層までは隅を二重の几帳面——角をけずりとり両側に刻み目をいれた形をいう——とした正方形であり、第六層では隅を単一の几帳面とした正方形とし、そして第七層から第九層までの上部三層が円形となっていることが知られる。

第一層の正方形の一辺の長さは百一十一メートル五十である。ところで、現在のボロブドールの第一層は、段逃げの二重構造になっているのであるが、一八八五年にオランダの考古学者アイゼルマンが調査したとき、第一層の壇台の背後に、施工半ばで放棄されて埋没された、創建当初の基壇の石積みが発見された。これによって、当初の設計ではボロブドールは八層の壇台ピラミッドであったことが知られた。しかも、この創建当初の基壇にも浮彫が見られることから、記述と理解との便宜を考えて、オリジナルな基部の石積みを旧基壇と呼び、段逃げで二重構造になっている現在の第一層の壇台を現基壇と呼ぶことになっている。

平面図ならびに断面図から見られるように、第一層の上に第二層が載せられ、さらにその上に第三層が積み重ねられる形式になっているので、各層の一辺の長さは上層のものほど次第に短くなっている。従って、それぞれの層の外側に幅がほぼ二メートルの廊下が造られてあって、第二層から第五層までの各層は一周することができ



第1図 中部ジャバ要地図

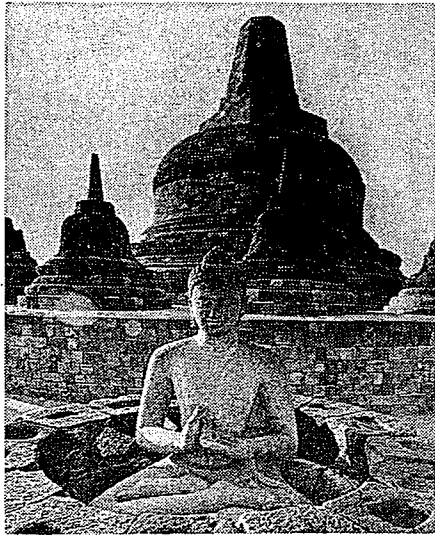
曾てジャバに存在した仏教徒の独自の世界観を示すものであり、それだけにその宗教史的背景が極めて重要であるといわねばならぬ。まず、その特異な形態と様式の概要を知る必要がある。

ボロブドールは中部ジャワの中心都市ジョクジャカルタの西北およそ四十三キロメートルの地点にある。ジョクジャカルタからマゲランに通ずる道路を約三十キロメートル西北進し、ムンチランの街を通り抜けて間もなく西進し、チャンディームドゥウ Candi Mendut の傍を通

り、プロゴ河を渡ると、間もなくボロブドールが現れる。東経百十度十三、南緯七度三十七の地点で、安山岩で建造された大塔である。筆者は昭和五十四年七月二日、そして昭和五十六年八月二十四日の二度この大塔を訪れ、詳さに現在修理中の大塔の一部を視察したのであるが、その初めて訪れたときの率直な感懐は今回の大修理着手以前の姿が見たかったということであり、そして周辺が観光地化してゆく様子を嘆かずにはいられなかった。

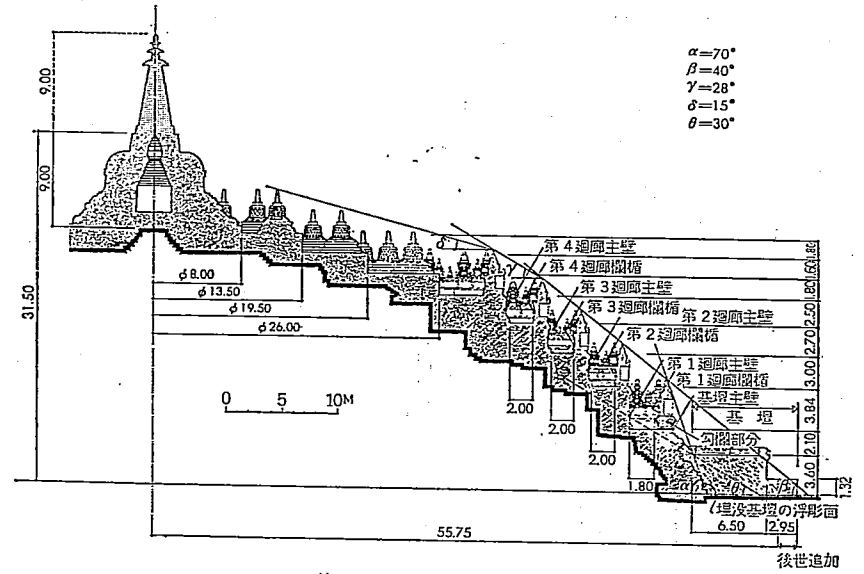
ボロブドール遺跡は所謂ケドゥ盆地の南部の一面を占める台地の上に位置しており、周辺は極めて肥沃な、人口密度の高い平原である。ケドゥ盆地の地質は、火山灰の多い沖積層で、現在ではプロゴ川の本流と支流とが深く狭い溪谷をえぐるように流れ、曾てとは平面的に相当異なった地理的条件を示しているのではないかと思われる。ボロブドールの近くには浅くて広い溪谷の跡が見られるからである。

ボロブドール遺構は高さ約二十メートルの丘の上に土盛りして構築されたものであるが、全体の外形の輪郭は



第4図 中心のストウーパとその周囲にある釣鐘形ストウーパおよびその内に祀られる仏像

ろである。ストウーパは、いずれも高さ約四メートルであるが、台座の直径は第七・第八両層のものが三メートル七十、第九層のものは三メートル四十である。第4図で見られるように、中央の釣鐘形の塔の上には底辺の長さ約四メートル五十の方形平面の梯形の台座があり、その上に八角形の相輪が立っているが、それは現在途中で折れてしまっている。第九層円壇の床面から方形平面の梯形の台座までの高さはほぼ九メートルで、地上からこの台座までの高さは約三十一メートル五十である。



第3図 ポロブドール断面図

$\alpha=70^\circ$   
 $\beta=40^\circ$   
 $\gamma=28^\circ$   
 $\delta=15^\circ$   
 $\theta=30^\circ$

る。なお、相輪が完全であれば、その先端は地上からおよそ四十二メートルであったと推定されている。

欄楯と 次に、第一廻廊(第二層)ないし第四廻廊(第五層)および第六層の外側に、厚い石積みみの壁が圍繞している。これを各廻廊および露台の欄楯と呼ぶ。そして、欄楯と向い合っている内側の壁を主壁と呼ぶのであるが、欄楯のない基壇にも主壁はあるので、主壁は第一層(基壇)から第五層まで五段あるわけである。

従って、主壁と欄楯との関係は、基壇(第一層)主壁の上に第一廻廊(第二層)欄楯があり、第一廻廊主壁の上に第二廻廊(第三層)欄楯が載るとい形式になっていて、第四廻廊(第五層)主壁の上に載る露壇(第六層)欄楯に至るのである。

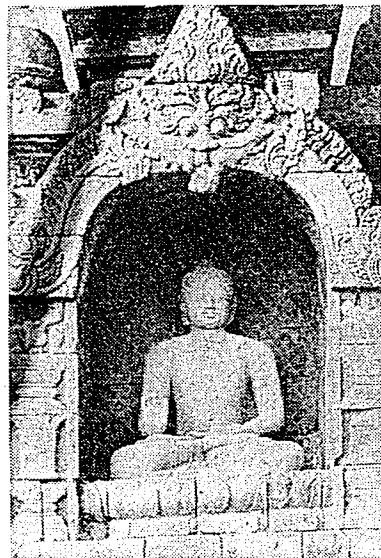
しかも、前記の五層の欄楯の外側には壁龕が一定間隔に配置され、その内部には各一体の石造の仏像が安置されている。これは一般に仏龕と呼ばれ、全体で四百三十二箇ある。すなわち、

基壇主壁の上に 二十六カ所  
 第一廻廊主壁の上に 二十六カ所

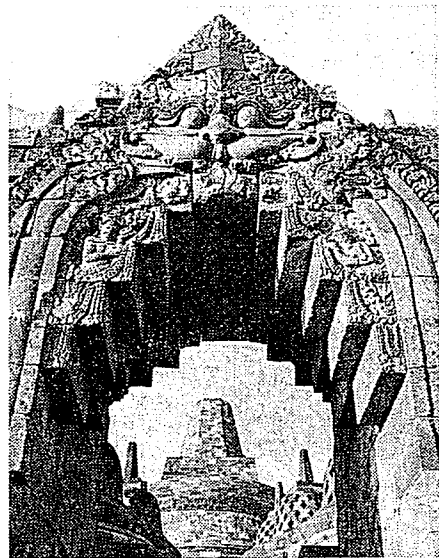
るようになっていて、この部分は廻廊と呼ばれる。そして、この廻廊は第二層から第五層までの四層にあり、下から第一廻廊ないし第四廻廊と呼ばれる。

第六層は隅を単一の几帳面にした正方形であるが、上に積み重ねられた第七層が直径五十二メートルの円形なので、外周は方形、内周は円形という特殊な形をしており、しかもかなり広い平面となっている。この特殊な形の第六層は露壇——英語で terrace——と呼ばれる。第七層の上に積み重ねられた第八層および第九層はもとより円壇で、第八層の直径は三十九メートル、第九層は直径二十七メートルで、その中央に前述のように直径十六メートルの鐘形の塔が立っている。

第七層から第九層に至る円壇には釣鐘形の目透し格子に石積みされたストウーパ(仏塔)があり、各円壇の周辺を縁どって等間隔に並んでいる。その数は、第七層には三十二、第八層には二十四、第九層には十六あり、これらのストウーパの中にはそれぞれ一体の仏像が外方に向かって安置されている。第4図の正面の仏像は目透し格子に石積みされた釣鐘形のストウーパを取り除いたところ



第5図 主壁上の仏龕



第6図 拱門

安置されていることについては、前に述べたところであるが、これらの仏像がいかなる仏を表わしているかを検討することは、ポロブドールの仏教史的背景を探る上に極めて重要である。

まず、中央の釣鐘形の塔の中に仏像は現在はないが、曾て一八四二年にケドゥ州の理事官ハルトマンが未完成の石像を発見したことが伝えられている。そして、その像は二十世紀になってファン・エルプのポロブドール修復工事の際に現在ポロブドールの建つ丘の西北隅の木蔭に露座のまま置かれている。この像が何故に未完成のままなのか、何故にこのような未完成の仏像が事もあるうに、このような建造仏の最頂部の、特に神聖視されるかと考えられる場所に置かれたか、これまで種々の議論が行なわれているが、この触地印の未完成仏に関して現在のところまだ何も判っていない。

次に、この中心の釣鐘形ストゥーパの周辺に、第七層から第九層にわたって、円壇上に目透し格子に石積みされた釣鐘形ストゥーパの中に安置されている仏像は、転法輪印を結ぶ釈迦牟尼仏である。現存するものの中で完

第二廻廊主壁の上に 二十二カ所  
第三廻廊主壁の上に 十八カ所  
第四廻廊主壁の上に 十六カ所

と、合計百八カ所あり、これが東西南北の四面のそれぞれにあるわけであるから、全体で四百三十二カ所ある。しかも、同一方角の仏龕の中には後述するように同一仏の仏像が安置されており、したがって仏龕の数は多いが、安置されている仏像は四種類に過ぎない。

なお、基壇および第一ないし第四廻廊の主壁には、それぞれ二十カ所の水はけ用の樋が設けられ、東西南北に面した各面の中央部には、地上から一直線に最頂部に達する階段が設けられている。この階段が欄楯を横切る箇所には、美事な装飾彫刻によつて飾られた拱門がある。

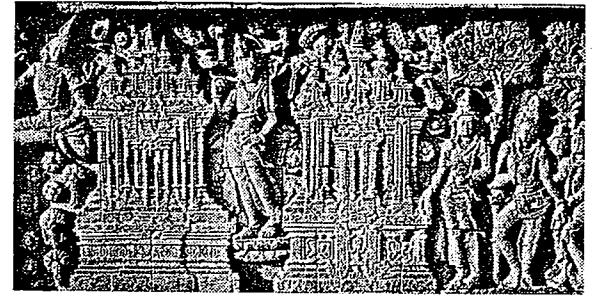
ポロブドール 基壇および第一廻廊（第一層）の仏像 二層から第四廻廊（第五層）に至る各主壁の上に、五層に重なって合計四百三十二箇の仏龕があり、その内部に各一体の石造の仏像が安置されていること、また第七層から第九層に至る各円壇上に合計七十二の釣鐘形のストゥーパがあり、その中に各一体の仏像が

全なものとは十一体に過ぎず、他は相当に損傷を受けている。

次に、基壇主壁の上から第三廻廊主壁の上までの、下から四層の仏龕の中にある仏像は、いずれも高さはほぼ一メートル三十で、蓮華座の上に結跏趺坐する坐像であるが、その多くも相当に損傷を受けているのが実状である。それらの仏像は、印相から見て、

- (一) 東側仏龕中にある九十二体——触地印
- (二) 南側仏龕中にある九十二体——与願印
- (三) 西側仏龕中にある九十二体——法界定印または弥陀定印
- (四) 北側仏龕中にある九十二体——施無畏印
- (五) 第四廻廊主壁上の仏龕内にある六十四体——説法印

となつている。そして、この場合、これらの印相をもつ諸仏が、(一)触地印の仏は阿闍如来、(二)与願印の仏は宝生如来、(三)定印の仏は阿彌陀如来、(四)施無畏印の仏は虚空成就如来、そして、(五)の説法印の仏は毘盧遮那仏であることは、ジャワ仏教の伝統を伝えるバリ島に伝えられた



第7図 ポロブドール浮彫（第四廻廊主壁、北面、No.60）  
「入法界品」

梵語経典『ブッダ・  
ヴェーダ』Buddha-  
veda の記事から明  
確に知りえられる。  
浮彫 ポロブドール  
の名を有  
名にしたのは、前記  
のような特異な建築  
様式もさることなが  
ら、主壁および欄楯  
の壁面に帯状に連な  
る多数の浮彫の彫刻  
である。これらの浮

彫には数種のモチーフを繰返し用いた裝飾意匠のものもあるが、特に著名なのは仏教の伝説あるいは経典の文面を順次に絵面に描いたものである。その画面の総数は、地下に埋没されている旧基壇のものを含めて総計一千四百六十面と数えられている。すなわち、  
(一)旧基壇 百六十面

- (二)第一廻廊主壁上段 百二十面
  - (三)同右 下段 百二十面
  - (四)第一廻廊欄楯上段 三百七十二面
  - (五)同右 下段 百二十八面
  - (六)第二廻廊主壁 百二十八面
  - (七)同右 欄楯 百面
  - (八)第三廻廊主壁 八十八面
  - (九)同右 欄楯 八十八面
  - (一〇)第四廻廊主壁 八十四面
  - (一一)同右 欄楯 七十二面
- 現存数合計 一千四百六十面
- 現在、各廻廊の欄楯のものが数多く亡失しており、創建当初には仏典関係の浮彫だけでも一千七百面以上あったのではないかと考えられている。

これらの浮彫のパネルすなわち切石の面のそれぞれが如何なる経典の内容を描き、如何なる仏教説話のどの場面を刻んだものであるかは、前記の(三)・(四)・(五)・(六)の一部分を除いて、今日まで多くの学者が研究を重ねてきており、大体の結論が得られている。今、その研究結果を

総合してみると、前記の十一の浮彫シリーズと仏典との関係は、大体において次のようである。すなわち、

- (一) 旧基壇の浮彫——『カルマ・ヴィバング』(業分  
別論)
- (二) 第一廻廊主壁上段の浮彫——『ラリタ・ヴィスタ  
ラ』(『方広大莊嚴經』)
- (三) 第一廻廊主壁下段の浮彫
- (四) 第一廻廊欄楯上段の浮彫 ジャータカおよび  
アヴァダーナ説話
- (五) 第一廻廊欄楯下段の浮彫
- (六) 第二廻廊欄楯の浮彫
- (七) 第二廻廊主壁の浮彫
- (八) 第三廻廊主壁の浮彫 『ガンダ・ヴューハ』
- (九) 第三廻廊欄楯の浮彫 『華嚴經』入法界品
- (一〇) 第四廻廊欄楯の浮彫
- (一一) 第四廻廊主壁の浮彫——『パドラーチャリー』  
(『普賢行願讚』)

である。(三)から(六)のジャータカおよびアヴァダーナ説話を描写した画面の同定に関しては若干問題も残されており、今後の研究を俟たねばならないが、それよ

りも重要なことは、ここに描出された経典の意義である。わが仏教学界の通例に従って大乘・小乗に区別するとすれば、(一)および(三)ないし(六)は小乗系であり、(二)と(七)ないし(一〇)は大乘に属する。何故に(二)の大乘経典浮彫しかも仏伝が小乗系の仏典の浮彫の間に挟まっているか、それが解釈されねばならぬ。

二

中部ジャワ ポロブドールは、ジャワの言葉で言えばのチャンディ チャンディ candi である。この語は一般的には所謂ヒンドゥー・ジャワ時代の宗教的建造物を総称して用いられ、「僧房」(サンスクリット語でヴィハール vihara)とされるサリとかプラオサンもチャンディ・サリあるいはチャンディ・プラオサンと呼ばれている。

さて、ポロブドールを中心としてケドゥ地方にはチャンディは多い。ヒンドゥー教に属するものがあり、仏教に属するものがあり、ポロブドールは勿論仏教に属する。これらのチャンディに関し、千原大五郎博士は「各

遺構の建築構成、裝飾細部の表現様式などを、体系的に分析して編年的考察に資することが、きわめて有効である」とし、「建築材料と建築の増進 mawrdhi とらう

独特な習慣」を建築的に考察し、次いで「基礎および身舎脚部のプロフィールの類型」を分類し、中部ジャワ期のチャンディの建立年代を次のように決定した。<sup>(7)</sup>

- 〔I〕ハイエン前期 Early Dieng Period (±650 A.D. ~ ±730 A.D.) — アルジュナ、ヤマール、スリキヤンディ。
- 〔II〕ハイエン後期 Later Dieng Period

シャインンドラ初期 Early Sailendra Period } (±730

A.D. ~ ±780 A.D.) — プンタディサオ、スンムドラ、

ガドツカチャ、ダラワティ、ピマ、ムドゥンニンム

グループ (筆者注記—以上がディエン後期に属す)

グヌンウキール (732 A.D.)、バドゥ、初代カラサ

ン (778 A.D.)、<sup>\*</sup>二代目カラサン、<sup>\*</sup>初代セウ (782 A.D.)、

バーン、<sup>\*</sup>初代ムンドウ (筆者注記—以上がシャインンドラ初期に属す)

〔III〕シャインンドラ盛期 } Borobudur Period (±780 A.D. (ボロブドール期))

~ 850 A.D.) — 現ムンドウ、<sup>\*</sup>ハオン、<sup>\*</sup>ヌガウエン、<sup>\*</sup>ボロブドール、<sup>\*</sup>現セウ (922 A.D.)、<sup>\*</sup>現カラサン、<sup>\*</sup>サリ

〔IV〕中部ジャワ末期 The Closing Period of the Cen-

tral Java (±850 A.D. ~ ±920 A.D.) — プリンガプス

(853 A.D.)、<sup>\*</sup>現ボロブドール、<sup>\*</sup>プラオサン (864 A.D.)、

ロロシヨングラン、<sup>\*</sup>サジワン、<sup>\*</sup>サンビサリ、<sup>\*</sup>ソム

リチ

以上が千原博士の説であるが、<sup>(8)</sup>本稿執筆の都合上から発表の形式を変更したこと、また理解の便宜上から、仏

教系チャンディに<sup>\*</sup>印を附したことに<sup>\*</sup>お許しを乞わねばならぬ。この表から知られることは、はじめケドゥ地方にはヒンドゥー教が栄えていたが、中ごろに仏教が進出してチャンディを建立し、九世紀中期以後に再びヒンドゥー教のチャンディの出現したことが知られる。こうして見ると、『ラーマヤーナ』の浮彫で有名なチャンディ=ロロシヨングランの出現は、ボロブドールに対し、何かを物語っているようである。<sup>(9)</sup>

マタラム王国とシ チャンディの宗教の変遷の跡は、<sup>\*</sup>シャインンドラ王朝 現地から出土した碑文からも裏つ

けされる。ジャワで最初の年次を有する碑文は西暦七三二年のサンジャヤ Sanjaya 王のチャンガル Canggal 碑文 (サンスクリット語) であるが、この碑文の出土地チャンガルはケドゥ州南部のマゲラン地区にあり、この碑文の内容から当時この地方をサンジャヤ王の統治していたことが知られる。<sup>(10)</sup>そして、同じくケドゥ州発見の西暦九〇七年のバリトゥン Balitung 王のマンティヤードシヒ Mantyasih 銅版碑文<sup>(11)</sup> (古代ジャワ語) には、サンジャヤ王を始祖とし、シヴァ教を奉じたマタラム Mataram という政権の存在したと、その九代目までの王名が記されているのである。しかも、ここに注意すべきは、サンジャヤ王は rakai Mataram sang ratu Sanjaya (マタラムの王なる聖サンジャヤ王) と記すが、他の王は単に「吉祥なる大王〇〇〇〇の王」とのみ記されているのである。例えば、第六代のピカタンは Sri maharaja rakai Pikatang と記され、第七代のカヌンギ Kayuwangi もこの碑文では同様に記されているが、別の碑文<sup>(12)</sup>ではサンスクリット語の即位名を持っている。このことは第六代のピカタンに至るまでの諸王にはないこと<sup>(13)</sup>で、これに

反し第七代以後の諸王はすべてなんらかのサンスクリット語の即位名を持っているのであって、あるなんらかの歴史事実を物語っている。

ところが、サンジャヤ王のチャンガル碑文の年次から半世紀も経っていない西暦七七八年のカラサン Kalasan 碑文 (サンスクリット語) にはシャイレンドラ Sailendra 王朝の名とともにマハーラージャ=パナンカラナ maharaja Panamkarana およびラクルヤン=パナンカラナ rakryan Panamkarana の名が見え、前述のマタラム王第二代のパナンカラナ Panangkaran と同一人物であることが知られる。しかも、カラサン碑文の内容を率直に検討してみると、この王がシャイレンドラ王家に服属し、その服属のしるしとしてカラサン寺を建立し、ターラー女神 (多羅觀音) を祀ったことが知られる。<sup>(14)</sup>

さらに、西暦七八二年のケルラク Kelurak 碑文 (サンスクリット語) によると、シャイレンドラ王家のサンダラーマダナンジャヤ Sangrāmadhananjaya 王の王師のクマーラゴーシヤ Kumārāghoṣa が王命を受けて文殊菩薩の像を建立したことを伝える。<sup>(15)</sup>この二碑文から八

に師事した) について胎蔵の大法を伝授されたという。このような記事から見て、訶陵国には八世紀に密教の栄えていたことが知られる。かくして、シャイレンドラ王朝と訶陵国とは

(一) 同じ時代に、現在のジャワに存在した。  
 (二) いずれも当時には大乘仏教とくに密教の栄えていたこと。

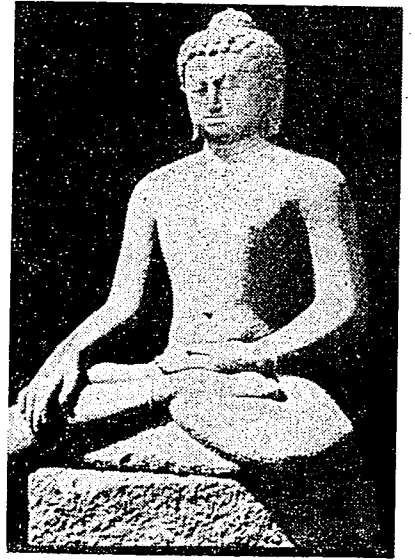
が知られる。当時、ジャワには、現地資料によれば、仏教の信奉者であるシャイレンドラ王朝とヒンドゥー教シヴァ派の信奉者であるマタラム王国との二つしか知られていないのであるから、前記の理由から中国史料に見える訶陵国がシャイレンドラ王朝をさすことは疑いえない。しかも、訶陵の名をシャイレンドラの写音と見るとも不可能ではない。何故なれば、訶陵の「訶」は当時の中国における写音の例から見て、H音を写すがK音その他の字を写すことはない。例えば、訳経僧の訶利跋陀羅は Haribhadra の写音であり、鬼子母神ハーリトティーは訶梨帝母と写されている。しかも、シャイレンドラの語頭音Sは口蓋音で、この音はインドネシ

ア系の言語にはなく、一般にサンスクリット語のś音はS音で写される。スマトラのシュリーヴィジャヤを故郷とする古代マライ語ではS↓Hの変化があることからみて、ジャワに五世紀のころから栄えたシャイレンドラ王朝の名が古代マライ語を用いる商人の口を通じて、中国に訶陵と伝わったことは、五世紀ごろ以後にマライ半島方面に栄えた盤々などのマライ系の諸国と中国との通交を考えると、当然のことと思われる。

こうして、シャイレンドラ王朝すなわち訶陵には八世紀のころに大乘仏教とくに密教の栄えていたことが知られる。しかも、弁弘に関する記事から胎蔵界密教の伝わっていないことは明らかであり、この点ボロブドールの仏教にも相通ずるところである。前述したように、五仏の名が印相から知られるが、それは阿闍如来・宝生如来・阿弥陀如来・不空成就如来と説法印の毘盧遮那仏である。今、これを真言宗という金剛界の五仏と比較すると、前四者は方角も印相も全く同じであるに拘わらず、第五は智拳印の大日如来(胎蔵界の大日如来は法界定印である)に該当する。毘盧遮那仏の原名はヴァイロー

世紀の後半にシャイレンドラ王朝がオパク河畔に進出し、しかも大乘仏教を奉じていたことは明らかである。そして、シャイレンドラ王朝は十箇前後の碑文を遺しているのであるが、一つの例外(ナーランダー碑文)を除いて、すべてケドゥ州において発見され、就中七九二年のラトゥバ<sup>(14)</sup> Ratu Baka 碑文にはシャイレンドラ王ダルマトゥンガ Dharmatunga (サンスクリット名)、また八二四年のカラントゥンガ Karantengah 碑文には同じくサマラトゥンガ Samaratunga 王と王女プラーモ<sup>(15)</sup> ヲ<sup>(16)</sup> ヲ<sup>(17)</sup> Prāmodavardhani (いずれもサンスクリット名)の名が見え、後者では王女が仏教寺院を建立した旨を伝える。また、ナーランダー碑文(西暦八五〇年以後)においては、ヤヴァ<sup>(18)</sup> ヲ<sup>(19)</sup> ヲ<sup>(20)</sup> Yavahūmi (ジャワ)のシャイレンドラ王家の子孫であるスヴァアルナー<sup>(21)</sup> ドウ<sup>(22)</sup> ヲ<sup>(23)</sup> Svavardya (すなわちスマトラ)の王バ<sup>(24)</sup> ラ<sup>(25)</sup> ヲ<sup>(26)</sup> Palaputa がインドのナーランダー寺院に村落を寄進したことを記す。こうして、シャイレンドラ王家が大乘仏教を信奉したことは明らかである。しかも、この事実は中国史料からも確かめられる。

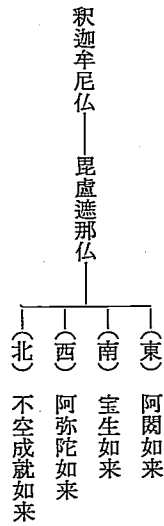
訶陵とシャイとところが、不思議なことに、シャイレンドラに該当する漢語名は中国史料に見あたらないとされる。しかし、ジャワにおけるシャイレンドラ王朝の支配の時期に「社婆と曰い闍婆と曰う、前海中にある訶陵」という国が西暦六四〇年から唐の咸通年間(八六六―八七三)まで中国に使節を派遣したことが知られる。<sup>(17)</sup> しかも、麟徳年間(六六四―六六五)には中国の僧会寧が訶陵国にて若那跋陀羅 Jñābhadrā (智賢)と小乗経典を翻訳したことが知られ、また七一八年には真言密教の第六祖とされる、数多くの密教経典の漢訳者である不空 Amoghavajra が闍婆国で金剛智に師事したという記事があり、いずれも中国に渡って真言密教の弘法につとめたことが知られている。さらに、空海(七七四―八三三)の『秘密曼荼羅教付法伝』巻二には、訶陵国の弁弘は本国にあつたとき如意輪の瑜伽を誦持して法力を得ていたが、大毗盧遮那大悲胎蔵漫荼羅の法が南天竺にありと聞き、南天竺に渡ろうとしたが、不空が唐に将ち去ったとき、唐に赴き、長安の青龍寺において不空の弟子惠果(八〇四年から同六年に至る間、空海もこの人



第8図 触地印の阿闍如来(東側)

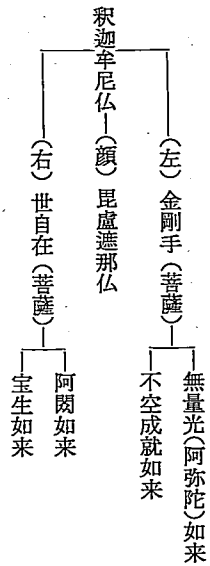
チャナ Vairocana であり、大日如来のそれはマハーヴァイローチャナ Mahāvairocana である。わが国における一部の人のように、ヴァイローチャナとマハーヴァイローチャナとは同じ仏であるとするならば、いざ知らず、毘盧遮那仏である奈良の大仏を大日如来であるとする人はいないであろうし、毘盧遮那仏は『華嚴経』の仏であり、大日如来は『大日経』の主人公である。しかし、大日如来が毘盧遮那仏から展開した仏であることは明らかである。従って、ボロブドールの五仏は金剛界の五仏の前段階であることが知られる。なお、前述の『ブ

〔第一表〕



となる。ところが、ほぼ十世紀ないし十一世紀ごろに成立したジャワ仏教の教説の綱要書『聖大乘論』 Sanghyang Kanahayānikan の記述によると、釈迦牟尼の右側から世自在、左側から金剛手、そして顔から毘盧遮那仏が生ずる。しかも、世自在から阿闍と宝生とが生じ、金剛手から無量光と不空成就とが生じたという。今、これを表示すると、

〔第二表〕



となる。第一表と第二表とを比較してみると、

『ブッダヴェーダ』では、毘盧遮那仏は宝幢印であると記される<sup>(18)</sup>。いずれにせよ、ボロブドールは仏教の信奉者であったシャイレンドラ王朝によって、八世紀の後半から九世紀の前半に建立されたことは明らかである。

三

ボロブドールにおける前節において、シャイレンドラる仏像配置の問題点 王朝すなわち訶陵は大乗仏教とくに密教の信奉者であったことを論じたが、末尾において単に「仏教の信奉者」であると記したについては、理由があるのである。ボロブドールに見られる仏教は正直言つて複雑であるからである。前述のように、第四廻廊主壁上の仏龕と四方のそれに祀られた仏の様相から見ると、金剛界の前段階を示すようであることは事実である。

しかし、ボロブドールにおける仏像はこれら五仏の座の上にある円壇上に、なお前述のように、目透し格子に石積みされた釣鐘形のストウパーの中に転法輪印の釈迦牟尼仏が安置されている。この構成を表示すると、

(一) 第一表における四方仏の概念が第二表に見られぬこと。しかし、両者を併せて考察すると、ボロブドールは東方と南方とを右側とし、北方と西方とを左側としていることが判明する。すなわち、ボロブドールの正面は東北方であることが知られる。

(二) 第二表には、釈迦牟尼仏の顔から毘盧遮那仏が生じ、左側から金剛手、右側から世自在が生じたとする。これは『リグヴェーダ』の「プルシャースークタ」に通ずる思想で、『聖大乘論』がヒンドゥー教の影響を受けている事実を示す。この事実には、ボロブドールの諸仏の配置が、後世にジャワ仏教とヒンドゥー教シヴァ派とが習合したジャマニブド(Jaman Buda) 以前の仏教思想を示していることを明らかにする。

(三) 第一表は、ジャワ仏教では直接知られないが、インドの仏身思想を表現しており、応身仏から報身仏が出現する次第を明示するが、やがて『聖大乘論』に出現するアーディブッダ Adī-Buddha の



先駆者としての法身仏としての釈迦牟尼仏を示している。

ボロブドールの仏教を問題にして「五如来」ならびに原初仏の先駆者としての釈迦牟尼仏の名を挙げたが、ボロブドールの仏教にはまだ一千四百六十面の浮彫がある。その内容は、前述のように所謂大乘経典と小乗経典とが含まれる。そこから、ボロブドールが何を意味したかが問題となろう。

ボロブドール 以上論じてきたところから、ボロブドの意味するもの ールの仏塔は

(一) 大乘と小乗との習合したもの。

(二) 密教的色彩を帯びている。

ことは明らかである。しかも、第二廻廊主壁には、善知識を歴訪する善財童子がマハーデーヴァすなわちシヴァ神を訪れて教えを請う浮彫が二面あり、

(三) ヒンドゥー教の影響が見られること。も指摘されている。

こうして、独自の建築様式を示し、仏像および浮彫が複雑な内容を示すボロブドールは、果して何を意味する

のであろうか。現在までに提出された諸学説を集約すると、大体において次の七説があると考えられる。すなわち、

(一) 祖先崇拜観念の象徴。

(二) 曼荼羅説。

(三) 三界説。

(四) 十地思想の表現。

(五) 華嚴経の世界。

(六) 波羅蜜思想の具象化。

(七) 瞑想過程の表現。

の七説である。以下、それぞれを簡単に紹介することにしよう。

まず、第一説<sup>(20)</sup>であるが、ジャワの土着固有文化の要素の一つとして、山の斜面に山頂に向かって段台ピラミッド状のテラスを造成し、その最高の、山頂に最も近い段丘の上に祖先崇拜の象徴として祠<sup>ヒコ</sup>を建てるといふ風習があり、十四世紀以降の所謂ヒンドゥー・ジャワ文化の盛んな時期に東部ジャワに数多くのチャンディがそのために建立された。ボロブドールの方形の段台ピラミッドの

下部構造を前述の祖先崇拜観念の象徴と見る説は、現在ではインドネシアの学界ではほとんど定説化していることであるが、下部構造をそのように考えるところとして、浮彫をどう考えるか、上部の円壇ならびにそこに安置される仏を何と理解するか、など問題が残されているようである。

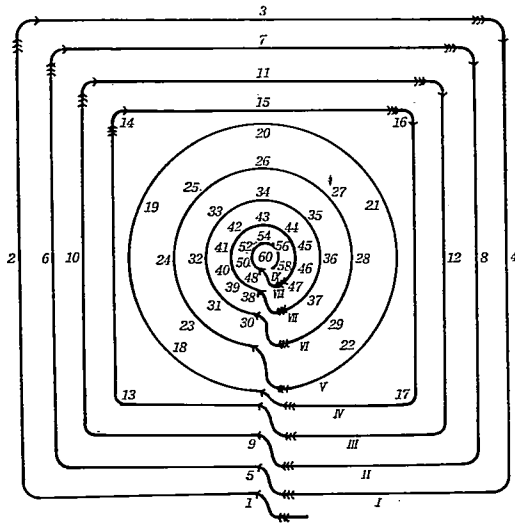
次に、第二の「曼荼羅説<sup>(21)</sup>」であるが、ボロブドールの平面図からマンダラを想定し、ボロブドールの建築様式から、これを立体マンダラとし、原初のチャイテイヤと見るものである。しかし、立体マンダラなるものは他に類例がなく、しかも現在の平面マンダラを見ると、マンダラの各部の仏はすべて異なるにかかわらず、ボロブドールでは東西南北ならびに上部のそれぞれにおいて、前述のように同一仏である。ボロブドールの五仏が金剛界の五仏の先駆と見ても、現在の金剛界曼荼羅とは全く異なることを認めねばならぬ。

第三の「三界説<sup>(22)</sup>」は、ボロブドールの旧基壇を欲界 Kama-dhatu を表現するとし、その上部の方形の部分を色界 Rupa-dhatu とし、円壇上を無色界 Arupa-dhatu

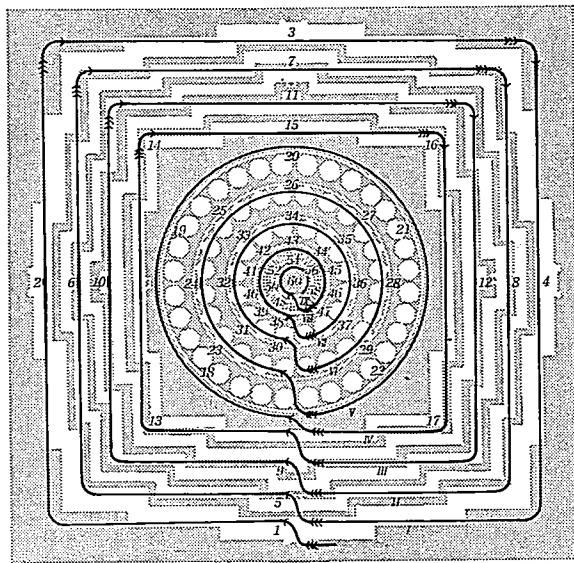
と見るものであるが、円壇上を無色界と見なすのは一応うへなわれるとしても、現在浮彫のある方形の部分を色界と見なす根拠は全く知られない。旧基壇の浮彫は「業」の種と相を表現するとしても、欲界の六天は認められない。もつとも、旧基壇は未完成に終わっているので、そこまでに至らなかつたかも知れない。

第四の「十地説<sup>(23)</sup>」は西暦八四二年のマダラン Magelang 碑文<sup>(24)</sup>にカフルンナン(皇后)がカムラーン・イブー・ミサン・ブーラ Kamulan i bhumi sambhara という祠堂に土地を寄進した旨の記事のあることから、ここに登場するカフルンナンをプラモダヴァアルダニーとし、この祠堂をボロブドールであると解して、その意味を「十地 dasabhūmi の山」と解したのに基づく。しかし、この碑文には「十」という数字も「菩薩」という語も出てこないものである。しかも、ボロブドールの浮彫その他から見て「入法界品」は明らかとしても、『華嚴経』の「十地品」(単行の仏典として『十地経』)に基づく菩薩の十地思想が当時のジャワに渡来していたとは考えられないのである。

よれば瞑想の段階に六十ありとし、それを第10図のようにボロブドールの平面図に重ねて説明しようとするものである。パーリ語仏典の本拠セイロン(現在のスリランカ)とジャワと交渉のあったことはラトウリポコ碑文からも知られるが、パーリ語仏典の教学はジャワ仏教のどの面にも認められないし、瞑想の各段階を浮彫あるいは円壇



第9図 瞑想の経路



第10図 ボロブドールの平面図に瞑想の経路を重ねた図

上の仏像に該当させる根拠も明確でない。今日まで誰も論じなかった廻廊の意義を認めた点でわれわれの注意を惹くものはあるが、なお説明不十分であり、いわば思考の遊戯に終わっている憾みがある。

それでは、筆者は何と考えるか。まず第一に、ボロブドールは仏教徒の建立であり、これに対してヒンドウ

次に、第四説に関連して、あるいは拡大解釈して、第五の「華嚴経の世界」説がある。事実、ボロブドールの第二廻廊主壁から第四廻廊欄楯に至るまで現在『華嚴経』六十巻本および八十巻本の末尾をなす「入法界品」Gandavyūhaの浮彫が三百七十六面ある。しかし、『ガンダヴューハ』という仏典は元來単行の仏典で、その南伝本が所謂『四十華嚴』である。すなわち、現在のオリッサ州地方(南天竺烏荼国)の王であったシュバカラシンハ Subhakarasiṃha(作清浄師子王)が中国に贈ったことがその奥書から知られる。しかも、ケルラク碑文も見られるクマラーゴーシヤは現在のベンガル地方の出身であるから、南伝の『ガンダヴューハ』がジャワ方面に伝えられていたことは十分に考えられる。従って、それがそのまま『華嚴経』につながることは考えがたい。ボロブドールを華嚴経の世界すなわち蓮華藏世界の表象と考えることは不可能に近い。ただ、円壇上の釣鐘形ストウーパが目透し格子に石積みされ、あたかも網状を示していることは、蓮華藏世界の蓮華網となんらかの関係を示唆するかに思われる。

次に、第六の「波羅蜜思想の具象化」説はわが千原博士が建築学的に提唱するところで、ボロブドールの創建当初には六波羅蜜思想に基づいていたのではないかとし、さらに三層の円壇の上にある中心ストウーパを一層と数え、全体で十層になるように設計を変更したのではないかというものである。事実、ジャワには六波羅蜜に慈・悲・喜・捨の四者(北伝仏教でいう「四無量心」)を加えた十波羅蜜思想があり、この宗教的表現と設計変更によって十層になった建造物の建築的表現との符節が合致することになる。しかし、この説に従うとなれば、基壇の浮彫が「布施」をあらわし、第一層のそれが「持戒」をあらわすというような宗教的証明が欲しい。このような証明が可能であれば、第四層などにおける「入法界品」の浮彫の重複も、あるいは解釈されるようになるかも知れない。そして、その場合、第六層以上を「四無量心」の各項に該当させることは、ドグマとして十分に容認されよう。

最後の第七説「瞑想過程の表現」と見る説は廻廊の意義を重視した点で注目される。すなわち、パーリ語仏典に

教徒のマトラム王国が政治力を回復したのちに、ロロ

II ジョングランを仏教系チャンディ(カラサン、セウ、プラオサンなど)の多いオバク河畔に建立して、ヒンドゥー教徒としての威力を誇示したものと考える。すなわち、ポロブドールは八・九世紀ごろのジャワ仏教徒のシンボルであったことは事実である。しかし、当時において仏教とかヒンドゥー教という宗教上の問題は為政者すなわち王家とそれに仕える高官(恐らくはその一部)に関係のあることで、一般大衆の関与するところではなかったかと思われる。このことは、前述のように、ポロブドールにヒンドゥー教の影響の見られることから知られる。このような事情を考えると、ポロブドールは仏教者による民衆教化の霊場と考えるのが最も適切であると考えられる。まず、廻廊のあることは見てまわるためであることを確認しなければならない。そうすれば、廻廊の意義も十分に理解されよう。また、参詣者が案内者に導かれて説明を聞いたと考えれば、各欄楯なり主壁に彫られた浮彫の役割も明確にされよう。さらに、この浮彫に描かれた経典の意義も明白となると同時に、その順序も理

解されよう。

旧基壇に未完成のまま埋めこまれた浮彫は『カルマII ヴィバンガ』(業の分類)の意)であり、人間の業を分類し、因果応報を説く経典である。第一廻廊主壁上段の浮彫は仏伝文学『ラリタヴィスタラ』に基づき、ここで巡拝者は仏教の開祖ブッダの輝かしい伝記を見せられて、仏教の開祖ブッダに対する畏敬と仏教の素晴らしさを印象づけられる。次に、ジャータカ(本生譚)はブッダが前世において菩薩として如何なる善業を遂行したことにより今生においてブッダと成ることをえたかを説く物語であり、アヴァダーナは仏弟子や敬虔な仏教信者の前世の善業と今生における果報を説く物語である。従って、巡拝者はここで因果応報とくに善因善果のいかに尊いことかを教えられるのである。第二廻廊の欄楯を見て廻って善因善果の勝れた綺譚を(恐らくは聞き)知った巡拝者は、もう一度(恐らくは導かれて)第二廻廊をまわり、主壁に描かれた善財童子の求法譚を知り、求法の楽しさと誰にでも法を聞けるという容易さをさと、第四廻廊主壁の浮彫に描かれた『普賢行願讃』の文句も耳

の奥底に残るであろう。そして、上に登れば、仏の世界である。しかし、その仏は目透し格子に石積みされた釣鐘形のストゥーパの中に鎮座しているのであるが、網目の中にほんやりと見えるだけで、恐らくは求道心を目覚めされた巡拝者にある種の焦燥感を抱かせよう。そして、上へ上へと登らせ、最後に高い相輪の立つ最高壇に達する。この中央の釣鐘形の塔の上にある底辺の長さ約四メートル五十の方形平面の梯形の台座は、恐らくはインドのストゥーパの頂上にあつて、仏舍利をおさめたハルミカーhamika(方龜)の模倣であろう。巡拝者はここに至って晴々とした求道心を持つに至ったと思われる。

要するに、筆者の見解では、ポロブドールの浮彫はいわば「絵解き」の素材であつたということである。絵解きのために、チベットではタンカ(一種の掛軸)を用いた。敦煌では、壁画がその用に供せられた。わが国では、壁画も掛軸も絵解きに用いられた上に、絵巻物という独自の材料を生み出した。ジャワでは、近くにメラピの火山があつて入手し易く、しかも彫刻の容易である安山岩に事かくことはなかつた。そこで、業の怖ろしさを

教え、善因善果の素晴らしさ、求道の楽しさ、容易さを説くために、浮彫を並べて絵解きの用に供した。中央のストゥーパを加えて十層としたについては、十波羅蜜や菩薩の十地思想が影響を及ぼしたかも知れない。また、インドのストゥーパ(平面図は円形)と異なつて台座を正方形にしたにおいては、ジャワ独自の美学概念というよりは、むしろ祖先崇拜観念が働いていたかも知れない。そして、たまたまその平面図がマンダラに似てきたのかも知れない。そのいずれにせよ、ポロブドールの仏教を、その全体を総括して見るとき、それは難かしい教義による建立を考えるより、善因善果を教える民衆教化の霊場とすべきであり、最初は二千面にも達したかと考えられる浮彫は「絵解き」のためであつたことが知られよう。

本稿の執筆に当つては、千原博士の左記の三著に負うところ多く、しかも図版の複写を許された。ここに記して、衷心より感謝してやまない。

(一) 『仏跡ポロブドール』 昭44 東京。

(二) 『ポロブドールの建築』 昭45 東京。

(三) 『インドネシア建築史』 昭50 東京。

注

(一) Proceedings of the International Symposium on Chandi Borobudur, Tokyo 1980. 『国誌』シンガポールの「ホロンドールの宗教美術とその保存」東京、一九八〇年。

以下に引用するときは単に『議事録』と記し、ページ数は和文のものとする。

(2) 以下、ホロンドール遺跡の外形的形式に関する記述は、千原博士の著書と自身の目撃したところを依る。

(3) Sanskrit Texts from Bali, critically edited with an introduction, by Sylvain Lévi, Baroda 1933 (Gaekward's Oriental Series, Vol. LXVII), pp. 66—67.

(4) 千原大五郎『中部ジャワのチャンディ建築に対する編年的考察』(『日本建築学会論文集』第二三八号、昭和50年12月)一三五—一四一ページ。

(5) スクモノ博士(ホロンドール修復公園副総裁)も西暦八百年以前に関して同じような結論を発表している。Early South-East Asia, Essays in Archaeology, History, and Historical Geography, edited by R. B. Smith and W. Watson, New York and Kuala Lumpur 1979, pp. 457—472 (The Archaeology of Central

Java before 800 A.D.)

(6) 『議事録』七ページ右におけるスレイマン女史の記述を参照せよ。なお、女史はロロジョン・グラムの建立を西暦八五六年とする。同書一二二ページ。

(7) チャンガン碑文の記述は Kern, H., Verspreide Geschriften, Vol. VII (1917), pp. 115—128. Sarkar, H. B.: Corpus of the Inscriptions of Java, Calcutta 1972, Vol. I, pp. 15—24.

(8) Sarkar, op. cit., Vol. II, pp. 64—81.

(9) Sarkar, op. cit., Vol. I, pp. 278—287. と記される Magelang 地区出土の Ramni (Ngabean) 銅版碑文(シヤカ紀元八〇四年—西暦八八二年)の第二行には tatkāla ajña śrī mahārāja rake Kayuwangi śrī Saijanotsavatungga tumurn i rakarayān, mapathih.....

「そのとき、吉祥なる大王として吉祥なる Saijanotsavatungga の称号のカノロンギ王の命令が藩王、大臣……と告げられた。」

と記される。この称号はサンスクリット語で「勝れた人々の歓喜する異者」を意味する。

(10) Majumdar, R. C.: Suvannadvīpa, Part I: Political History, Dacca 1937, p. 239. 参照。

(11) Majumdar, op. cit., p. 241.

(12) 著者『Sailendra 王朝の Chandi Borobudur』(『東

アジア—歴史と文化』10(昭56)一七—三三ページ)の中で、カラサン碑文を和訳して詳論した。また、『議事録』八四・八九ページを見よ。なお、このことは一九六二年の『西南アジア』8 (pp. 47—68) に載せた『Sailendra 王朝の Mataram 王国の Java 支配の過程』と著者がこの以来の筆者の見解である。

(13) Sarkar, op. cit., Vol. I, pp. 41—48.

(14) Sarkar, op. cit., Vol. I, pp. 48 (1)—48 (xvi).

(15) Sarkar, op. cit., Vol. I, pp. 64—75.

(16) Epigraphia Indica, Vol. XVII, p. 310. Majumdar, op. cit., p. 152.

(17) 以下における詞陵に関する記事については、岩本(昭59)二三—三三ページ以下を見よ。なお、筆者は近く「詞陵」に関する総合的な研究を執筆する予定である。

(18) 注(3)の p. 66 参照。

(19) 以下の記述については、岩本(昭59)三十三—三十四ページおよび『議事録』八八—九二ページを見よ。

(20) 『議事録』一四〇—一四二(千原論文)

(21) 梅原祥雲『理趣経の研究』(一九三〇年)四六一—四八九ページ。この説は Zimmer, H.: Kunstform und yoga in indischen Kunstbild, Berlin 1926. と提唱され(筆者未見) Dumarçay, J.: Borobudur, Oxford 1978. より引用) 外国の学者に賛同する学者も多い。昭和五〇年ホロンドール国際シンポジウムの最後の討論

の際に筆者が疑問を出したところ、ケンペルス博士ならびにスクモノ博士から御答弁を頂いた。『議事録』一六三—一六四ページを見よ。

(22) Dumarçay の前記の書は三つの点で関する the often repeated division into the three spheres of Buddhism と記している(p. 39) Wickert, J. D.: Borobudur, Jakarta 1975, pp. 48—49. これは明確に示しているが、ヤンセン博士出版された素因書は多量の誤りを含んでいる。また、その図が正確な立場であるがロンドン・ペンタゴン公園壁画(Borobudur-Prambanam, ed. by Japan International Cooperation Agency JICA Study Team)と p. 5 の図を示している。注(21)に記した筆者の質問の際にもこの疑問を提出し、千原博士から御答弁を頂いた。『議事録』一六四・一六五ページを見よ。

(23) de Casparis, J. G.: Inscriptions uit de Gailendra-Tijd, Bandung 1950, p. 169.

(24) de Casparis, op. cit., pp. 73—78. Sarkar, op. cit., Vol. I, pp. 102—111.

(25) 並川亮『ホロンドール—華嚴経の世界』(東京、昭53)。この書では所謂『華嚴経』と『入法界品』との関係に誤解があるようである。また、梅原猛氏が「京都新聞」昭和五十五年十月十三日号に「この説に賛意を表す。しかし、この説に関しては、毘盧遮那仏の礼讃とす

い、また本稿で後に述べるように、問題が残されたままと考へられ、今後の研究を要する。

- (26) 「大正藏經」第十卷 八四八中。
- (27) 『雜事錄』一四一一—一四三二頁。
- (28) Sang hyang Kamahāvānīkan. Oud-javansche Tekst met Inleiding, Vertaling en Aanteekeningen, door J. Kats, 's-Gravenhage 1910, pp. 34—45. Kitab suci: Sanghyang Kamahayanikan (Naskah-Terjemahan-Penjelasan), Tahun 1973, § 55—§ 84. 邦本『ヤン・カハントの公教』(「トミン公教」ヤン・カハント「二」四頁—六頁)
- (29) Lama Anagarika Govinda: Psycho-cosmic Symbolism of the Buddhist, Stūpa, Emeryville (California) 1976. 邦(日)文記したトミンヤン・カハントの教団の中で、邦土に於いたトミンヤン・カハントの語について説明をなした。『雜事錄』一六三二—一六三三頁。
- (30) de Casparis, J.G.: New Evidence on Cultural Relation between Java and Ceylon in Ancient Times, *Artibus Asiae*, XXIV (1961), pp. 241—248.
- (31) 邦本『雑事録卷の類聚をなすべし』(「日本宗教学物全集」59' (四七) pp. 58—77. 参照。

(ふたつとみ 中たか・創価大学教授)